

## 短期国際交流における高校生の異文化認知 II

### — 学校文化編 —

小池浩子 言語教育講座

#### 1 はじめに

国際交流プログラムは果して参加者にどのような成果をもたらすのであろうか。特に短期のプログラムでは参加者の異文化理解や異文化の人々とのコミュニケーションに将来役立つような影響はあるのだろうか。各地で盛んに国際交流が行われているなかで、そのような疑問も生じてくる。そこで、本研究では、高校生が短期海外派遣で異文化と交流をした結果を分析し考察する。研究の対象となった国際交流プログラムは、ある都道府県の外郭団体が主催したもので、この交流事業では現地の生徒と日本人生徒をパートナーとして組ませること、相手の家にホームステイすること、学校への通学、見学ツアーなどが計画された。本調査でもこれに呼応して、交流全般に対することがらと、学校について、家庭について、友人関係についてなどについてを調査したが、本論では、特に派遣生らが派遣先の学校に通学した経験をもとに、学校文化についてどのような文化的側面を認知し、どのような情動を抱いたのかに焦点を当てる。

#### 2 交流事業の概要

当該交流事業の概要については、交流全般で高校生が異文化をいかに認知したかを分析した論文（小池，2001）と共通であるが、必要上ここに再度記載することにする。交流事業の主体は、ある都道府県の国際交流に関わる外郭団体である。姉妹県・州・都市の中からベルリン市（ドイツ）、ニュー・サウス・ウェールズ州（オーストラリア）、北京市（中華人民共和国）、ソウル特別市（大韓民国）、カイロ県（エジプト）の5地域と相互受入、交流を行っている。それぞれの自治体には公募によって選定された日本人の高校生が6人ずつ派遣された。そして翌年には相手方自治体から、日本人の高校生のパートナーとなった生徒を日本に受け入れ、相互交流を実施している。

#### 事前研修

事前研修は、1泊2日の日程で、派遣の1ヶ月ないし2ヶ月前に行われた。派遣先によって出発日が異なるが、研修は合同で行われたものである。その内容は、ビザの取得、海外旅行保険などの実務的な説明、派遣先の文化・生活事情等の講義（派遣先自治体の事情に詳しい職員と派遣者OBによる）、派遣先で学ぶことや言語学習などに関するグループ討議、歓迎会等の出し物についての準備、そして異文化との接触についての学習（講義と体験学習）である。このように、この事前研修は海外渡航に必要な実務的な内容と、渡航先の文化について具体的に学ぶ「文化特定」の学習、それに異文化接触でどのような心の準備が必要かを考える「文化一般」的学習の3つの内容が組み込まれたプログラムである。派遣直前に行われるプログラムではこのような「文化一般」の学習が行われることは比較的困難、あるいは受講者の興味がそれとも言われるが（Hammer, Gudykusnt, & Wiseman, 1978）、筆者の観察によるとこの研修では、大多数の受講者の熱心な参加が見られた。また、OBの経験談や言葉の学習はもっと増やしてほしいとの要望が出された。この2点は帰国後の報告会でも確認されたものである。

### 交流プログラムの内容

ベルリン市（ドイツ）、ニュー・サウス・ウェールズ州（オーストラリア）、北京市（中華人民共和国）、ソウル特別市（大韓民国）、カイロ県（エジプト）の5地域にそれぞれ6人の日本人高校生と派遣主体の国際交流財団職員が派遣された。派遣期間は2週間である。派遣生には各自現地の同世代の生徒がパートナーとして選定され、日本人高校生は派遣期間中の多くの時間をそのパートナーと供に過ごすと共に、その生徒の家庭にホームステイし、家族との交流も行われた。週末をその家族らと過ごす機会も与えられた。派遣期間中の数日はそのパートナーが通う高等学校相当の学校に通学し、授業に参加した。通学の日数は派遣先によって異なる。これは受入先の諸事情と言語の問題などのためである。ソウルと北京は4日間、ベルリンは5日間、ニュー・サウスウェールズ州は8日間である。また、事業主体の団体の主宰する、市内見学及び近郊への観光も組み込まれた。学校通学の日程の少ない派遣先では代わりにこの比重が高くなった。

この交流プログラムで計画された高校生の体験学習は以下の点にまとめられる。a. 同世代の若者との対人コミュニケーション、b. 同世代の若者を持つ家族の家庭生活の経験、c. 現地の学校への通学経験、d. 学校内外での同世代の複数の若者とのコミュニケーション経験、e. 派遣市内と周辺の名所等の見学、の5点である。

## 3 研究方法

### 調査対象者

本調査の対象は国際交流のために世界の5地域に派遣された日本人高校生30人である。有効回答者数は29人。その派遣先の内訳は、ソウル特別市：5人、北京市：6人、カイロ県：6人、ニュー・サウス・ウェールズ州：6人、ベルリン市：6人である。ソウル特別市に派遣された1名からは都合により協力が得られなかった。

### 調査方法

帰国後に実施された報告会において、質問紙調査を行った。質問は、派遣全般について、学校について、現地の友人関係について、家庭についてに分けられている。今回の分析はこのうち学校についてが対象である。学校に関する質問項目には、どのような文化の違いを認知し、反応したかを問うものと、どのようなことがらに心を動かされたか（情動面）を問うものが含まれている。学校文化の違いの認知面を問うために、a. 派遣先の学校について日本の学校と違うなあと感じたことはどんな点か、という質問をした。情動面を問う質問項目は、b. 日本の学校と比べて好ましいと思ったことは何か、c. 現地の学校で困った（いやだった）ことはどんなことか、の2点である。肯定的方向に心を動かされたできごとと否定的な方向に心が動いたできごとの両面を把握しようとしたものである。なお、質問はすべて自由回答式の設定である。

### 分析方法

自由記述式の設定であり、複数の内容について答える回答者が多かったことから、回答数に制限を設けない複数回答として分析した。各自の回答は内容分析手法を用いてコード分類された。内容分析の手法としてはBabbie(1983)とBackstrom & Hursh-César(1981)それにクリッペンドルフ(1992)の自由記述式調査の分析法を参考にした。分析単位は言及単位、つまり「指示対象となっている特定の事物、事象、人物、行為、国、あるいは思想」（クリッペンドルフ、1992）などとした。さらに、細分

化されたコードを上位カテゴリーにまとめた。その後、同一コードの回答がどれほどあるか、その割合を有効回答者数を母数にして求めた。

#### 4 調査結果

##### 違いを感じたこと

表1は、高校生が短期間海外の学校への通学を体験してどのような点を日本の学校と違うと感じたかを分析した結果である。それによると、授業の内容について言及した生徒が最も多く、37.9%に上った。授業内容という分類には、その国や学校で力を入れている科目や日本には存在しないようなユニークな科目について、日本にもある科目でも日本とは異なる内容を扱っているなどの内容が含まれる。実際の回答を例としてあげると次のようなものである。なお、高校生のコメントはできるだけ記述された言いまわしを忠実に再現しているが、一部分かりやすさや匿名性の維持のために変更している。

「農業という授業があった点」

「選択科目がユニーク」

「語学に重点が置かれていて、それ以外の科目数が少ない」

「普通のときはまじめなのに体育の授業では女子は全然真面目じゃなくて座って話したり、ゴミとびとかしてて面白い」

「(語学以外の) その他の授業は全く真剣さを感じられず内容(理系教科)が易しい。現地の生徒は数に弱いようだ。」

表1 文化の違いに関する認知

N=29

内容	人数	割合	内容	人数	割合
授業内容	11	37.9%	学校や国への忠誠心	3	10.3%
施設	10	34.5%	学費	2	6.9%
授業の方法	9	31.0%	対人	2	6.9%
時間	8	27.6%	服装	2	6.9%
人数	7	24.1%	教室移動	1	3.4%
生徒の授業態度	7	24.1%	時間割	1	3.4%
生徒指導	6	20.7%	治安	1	3.4%
教育制度	4	13.8%	食事	1	3.4%
自由・校則	4	13.8%	計	83	286.2%
先生	4	13.8%			

次に際立ったのは、学校の施設に関する言及である。34.5%の生徒がこのことについて書いていた。施設については、校舎やグラウンド、教室などに関するものである。実際の回答例を挙げる。

「校舎が大きい、校庭も広い」

「設備が良い。コンピューターとか」

「誰が掃除しているんだ。いつも汚い」

3位は授業の方法についてであった。31.0%の派遣生がこれに関することを書いている。その中で目立つのは、先生が一方的に講義をするのではなく、生徒を参加させたりディスカッションを多く用いる授業だという点である。これに関するものが授業方法のコメントの半数近く、全体の13.8%であった。この他、黒板の使い方や語学クラスの教え方などの違いに気づいた派遣生がみられた。具体的には次のような回答があった。

「生徒がしょっちゅう発言する。教師からの一方通行でなく、ディスカッション中心の授業。授業中寝ている人なんかいない。」

「英語の授業はずっと英語でしゃべってる。」

「教室の机の置き方」

4番目の分類は時間にまつわることがらである。時間とは、時間の感覚がおおらかなこと、授業時間の長さ、休み時間の長さなどの問題である。27.6%が時間について言及していた。

つぎに多かったのは、学校やクラスの人数の問題である。ベルリンの学校の少人数制に言及した人が多かったが、ソウルへの派遣生は逆にクラスに50名もいるということに驚いている。

次は24.1%が言及した生徒の授業態度という分類である。この中身は日本の生徒と比較して勉強熱心であるというような内容が多いが、学校によってはそうではないところもあったようだ。

「本当に学ぶところといった感じでみんな勉強熱心な点」

「生徒が授業に対して積極的」

「授業態度がとても悪い」

次の生徒指導というカテゴリーには、授業内容以外の学校での指導などが含まれる。20.7%がこれに該当した。派遣先の文化を反映して、さまざまな内容が散見された。

「行進する」

「背の順にすわる」

「授業中飲み物を飲んだり机の上に置いておいても怒られない。」

「先生が生徒1人1人の生活まで指導している点」

この他、教育制度についてと自由・校則について、先生に関してがそれぞれ13.8%見られた。教育制度に関する回答の内容は、一貫教育についてや男女別学について、学年制についてなどである。自由・校則については、ソウル派遣生からの、校則が厳しいという声と、オーストラリア派遣生の自由だという声に分かれた。先生については、リラックスしていて親しみやすいというケースと、厳しいというもの、それに生徒が先生を尊敬に値する存在だと認識しているという回答がみられた。

学校や国歌への忠誠心に言及した人は10.3%みられた。「自分達の学校や自国に誇りを持っていること」「毎週月曜日に国旗掲揚と国歌斉唱すること」などが主たる回答で、どれも北京派遣者からの回答である。

以上が10%以上の回答者に共通して見られた分類である。この他には、学費の安さ、外国人への態度（積極的に接してくること）、服装について等の内容が少数みられた。

### 好ましいと感じたこと

表2は学校に通学する体験を通して、現地の学校のどのようなところを好ましく感じたかという問いへの回答を分析した結果である。これも有効回答者は29人である。10%以上の有効回答者が好ましいとしたのは、a. 授業の内容、b. 授業の方法、c. 生徒の授業態度、d. 学校の施設、e. 食事、f. クラスの人数の6つに分類される内容であった。

好ましいと述べる高校生が最も高率で存在したのは、授業の内容に関する分類であった。27.6%がこの点を挙げている。良いと感じた授業の内容とは、具体的には次のようなことがらである。

- 「コンピューターの教育が進んでいる」
- 「体育の授業では自分のやりたいことができる」
- 「教科が少ないこと」
- 「勉強を詰め込んでやっていないこと」
- 「Commerceの授業」

このように、海外派遣された日本人高校生が外国の学校の授業で良いと感じたのは、コンピュータ関連の授業など実践的な内容や、自由に内容を選べる体育の授業、詰め込み教育でないことなど点であった。

表2 学校文化で好ましいと感じたことがら

N=29

内容	人数	割合
授業内容	8	27.6%
授業の方法	6	20.7%
生徒の授業態度	6	20.7%
施設	6	20.7%
食事	4	13.8%
クラスの数	4	13.8%
その他	13	44.8%
なし	1	3.4%
計	48	165.5%

次の授業の方法に関連したことがらには20.7%が言及している。日本の高校生が良いと思った海外の授業とはどのようなものだろうか。

「先生と生徒の授業の中でのやり取りが多く、討論しながらノートに書き取る。みんな手を挙げて質問などするので、意見がはっきり伝えられ、先生、生徒にわかってもらえること。寝ている人もいなく、全員で授業を進める。」

### 「口語中心の語学教育」

これらは代表的な一部のコメントであるが、違いの認知のところで述べられていたことのうちの、ディスカッションを多く取り入れた双方向授業についてと効果的な外国語の授業に関することの2点が特に良いとされている。

また、海外の生徒の授業態度を好ましく感じたと述べる派遣生が 20.7%である。その回答はすべて、主体的かつ積極的に授業に参加し、発言をしているという内容である。具体的な回答を拾ってみる。

「授業が全く受身でなく、生徒の口からポンポンと意見や質問が出てくること」

「生徒の授業に対する姿勢が本当に集中していて真面目で遅刻や寝ている人もいなかった」

「楽しんで授業を受けている」

同じく 20.7%は施設に関することを好ましいとしている。派遣先の事情によっていろいろな内容が出てくる。校舎やグラウンドの広さについて、芝生がありその上を利用できること、生徒が自由に使えるミーティングルームがありそこにソファがあること、夜まで教室が生徒に開放されていること等である。学びの場としての空間だけでなく、生徒がリラックスできるような、いわば生活の場のようなところが学校にあることを好ましく感じるようである。

食事については 13.8%がコメントしている。学食等で売っているもののおいしそうという人と、「数人でお弁当を全部広げてつき合うこと」というような食べ方について述べたものがみられる。

同じく 13.8%はクラスの数について好ましく思っている。そのすべての回答は、クラスの数が少ないことが良いという内容である。違いの認知への回答では、人数が多いことに驚いたというソウルからの報告があったが、そちらを好ましく思うとする回答はなかった。

以上が10%以上の回答があった分類項目である。この他はすべて1人ずつの回答(3.6%)であったのでまとめてその他とした。例えば、「みんなはじめから心を開いてくれる」という外国人への態度、接し方についてや、「腕を組んだり手をつないだりするの人は近くに感じられてとてもよい」など非言語行動について、「先生と生徒の距離が短いこと」、「先生が尊敬に値する存在であること」  
「朝の集会の整列や行進がとてもそろっていて綺麗だったこと」、「昼休みが100分もあった」などである。

### 困難を感じたことから

海外の学校を体験して、派遣生が否定的に感じたことを分析すると、違いの認知や肯定的に感じたことにくらべて全体的に回答が少なかったことが分かる。違いの認知が 83 回答、肯定的側面は 48 回答あったのに対して、否定的側面は 38 回答と、平均して一人当たり 1.3 点ほどの回答数であった。また、困ったことやいやだったことは特にないと回答した人がとても多かった(27.6%)ことも特徴的である。

最も困難を感じずる人が多かった(27.6%)のはことばの問題であった。自分や現地の人の英語力が低く、コミュニケーションの障害となったという内容がほとんどであった。具体的なコメントの例は次のようなものであった。

「友達同士の会話についていけない。」

「パートナー以外はあまり英語で会話できる生徒がいなかったこと」  
「英語と体育の他は授業を受けてもぜんぜんわからなかったこと」  
「ドイツ語だらけで疲れた」

表3 否定的な情動を感じたとき

N=29

内容	人数	割合
ことば	8	27.6%
対人関係	5	17.2%
トイレ	4	13.8%
時間	2	6.9%
地理不案内	2	6.9%
他	11	37.9%
なし	8	27.6%
計	38	131.0%

2番目に否定的に感じた派遣生が多かったのは対人関係であった。20.7%がこれに分類された。その中では外国人としての自分に対するローカルの人々の接し方についてが主である。実際の回答は次のようなものである。

「最初だけほんの少し珍しがられてじろじろみられたこと」  
「生徒たちが常にすごい勢いで話しかけたり追いかけてきたので、それだけで疲れた」  
「からかわれた」

3番目はトイレに関する問題で、13.8%の回答がこれについて述べている。

「トイレが汚かった」  
「トイレに紙がない!! そして汚い」  
「トイレにドアがなかったこと」

これらはカイロ、ソウル、北京への派遣性からのコメントである。

10%以上を占めた項目は以上である。この他には、時間についてと地理不案内で困ったことが6.9%づつであった。時間については、「授業一コマがすっごく長くて少し退屈したこと」や「朝、1時限目がとっても早かったこと」に困難を感じた、というものである。地理不案内というものは、学校内等で部屋が多いため迷ったり、地理がわからないため一人で行動できなかったという内容である。

その他はそれぞれ1人づつからのコメントで、教室移動が大変、学校全体や1クラスの数が多すぎて教室が狭い、日本語を学んでいる様子が知りたかったのに日本語のクラスがなかったこと、服装がいつもジャージでかわいそう、などである。また、「語学以外の授業はとても授業と言えず、私が行ったためか、みなとてもさわがしくなって授業にならず先生に悪いと思った」との報告もあった。

## 考察

派遣生は数日現地の学校に通学しただけである。したがって、認知された文化的差異は、比較的目的に見えやすい内容が多い。カリキュラムや参加した授業で扱っていた内容、授業の行い方、生徒の参加態度、施設、教育制度についてなどである。学校文化に内在化された諸問題、例えば生徒間の人間関係や生徒の考え方、授業以外のさまざまな行動特徴のような内容にはまだ気づくところまでいかないうのである。彼らが気づいたことと、長年海外で生活し、学校に通った日本人の児童生徒が日本に帰国した後に見せる学校内での行動特徴と比較すると興味深い。帰国児童生徒の特徴を見ると、日本の学校と海外の学校生徒の特徴の違いが浮き彫りになってくるからである。稲田（1993）によると、海外帰国児童生徒からは以下のような特性が分析されているという：

- a. 学習方法の好み。プロジェクトやディベート、ディスカッション、ロールプレイなど
- b. 質問、意見などの発言が多く、明確な内容の発言をする
- c. 発想がユニークである。人の意見とを批判的にみる目を持っている
- d. 生活がのびのびしている
- e. 自立、自助の精神がある
- f. 社交性が豊かである。年長者にも臆さない
- g. 公共エチケットが身についている
- h. ボランティア精神がある
- i. 複眼的なところ、幅広さがある
- j. 国際感覚が養われている

これらの特徴のうち、a. 学習方法の好み（プロジェクトやディベート、ディスカッション、ロールプレイなど）と、b. 質問、意見などの発言が多い、については派遣生も気づいているところである。しかし他の多くの項目については短期経験者からは違いが見られた、という報告はあまりなかった。このことから、短期の交流で気づかれる文化的特徴は限られた、文化の表層的なものになる、ということが分かる。

情動面はどうであろうか。いわゆる異文化適応の状態はこの情動から窺い知ることができるとされる（Church, 1982）。交流全般に関する報告（小池, 2001）と同様、高校生達はこの短期の異文化接触において否定的な面よりも肯定的な情動面を多く報告している。リスガード（Lysgaard, 1955）やアドラー（Adler, 1975）が述べているように、異文化接触の初期は、ハネムーン期とも呼ばれるように少々高揚した気持ちになりがちで、何でもよく見えてしまう人が多いことが報告されている。ちなみにアドラーは、異文化との接触による個人の変化を成長の過程ととらえ、自己認識や文化認識を、浅いものから深いものへと変化すると述べている。異文化と接触を、接触期、自己崩壊期、自己再統合期、自律期、独立期の5段階に分け、それぞれの段階における認知面や感情面、行動面の特徴をまとめている。それによると、初期の接触期を、認知面では、文化的差異に興味を持つが、文化の深い違いは認識されないこと、感情面では興奮や陽気さがみられることと特徴付けている。短期の交流しかなかったこの交流の当事者たちもまた、そのような時期であった可能性がある。長期間でより深いローカルの人々との交流は、否定的な面にも気づかせたり、否定的な情動が表に出る時期もあるはずであるが、このような短期の交流ではそこまではいかないうであろう。

好ましいと感じることがらは、自ずと各自が認知した文化的差異の中のものに限定されるわけであ



るが、特に、日本にはない特徴的な授業内容や生徒参加型の授業方法、生徒の授業への熱心な取り組み等授業のあり方についてがかなりの高い割合で好ましいとされた。彼らの求めているものは、知識詰め込み型の授業ではなく主体的に参加できる授業、実践的で遣り甲斐のある授業であるようだ。派遣生は、自ら国際交流に応募するような意識の高い生徒であると推測され、一般の日本の高校生を代表するサンプルではないが、日本の高校教育のあり方に対し、1つの示唆を与える意見としてみることができよう。

否定的な情動を抱いた最大の原因はことばの不自由さであった。心を通わせたり、十分な情報交換をするための共通した言語がいかに大切かを派遣生らは身をもって体験し、今後の言語学習の良い動機付けになったと思われる。ローカルの人々の、外国人である派遣生らへの接し方についても、文化背景の異なる人どうしの交流で何が大切か、心で感じ取ることができたのではないだろうか。「外国人」として扱われる経験は、国際的な視点に立ち、国内にあって外国出身者などとコミュニケーションをはかる際に相手の気持ちがわかるようになるための、有効なプロセスといえるのではなかろうか。

このように、短期国際交流プログラムにおける現地の学校への参加経験は、その期間の短さゆえ、深いレベルの異文化適応を促したり、当該文化の文化的スキーマを獲得したりするまでには至らないまでも、「違い」にふれる1つの機会を提供し、自分の文化を見つめ直したり、視野を広げる第一ステップとなったと言えるのではなかろうか。日本人の教育学部系大学生の、ホームステイや現地での教育実習を含む1ヶ月の短期異文化体験事例を観察し、分析した田淵(1992)は、次のように述べている。

米国文化の理解についていえば、1ヶ月という期間はあまりにも短すぎた。奥の深い異国文化が短期間で理解できるはずがない。けれども、自国文化を客観的に対象化して見つめようとする態度や視点が与えられたと筆者は考えている。(p.73)

ただし、この経験が、各自の異文化間コミュニケーション能力や国際人としてのあり方にいかに貢献するかは、今後受ける教育や経験によるところが大きいであろう。

#### 参考文献

- Adler, P. (1975). The transitional experience: An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*, 15 (4), 13-23.
- Church, A. (1982). Sojourner adjustment. *Psychological Bulletin*, 91 (3), 540-572.
- Babbie, E. (1983). *The practice of social research (3rd ed.)*. Belmont, CA.: Wadsworth.
- Backstrom, C., & Hursh-Csar, G. (1981). *Survey research (2nd ed.)*. New York: John Wiley & Sons.
- Gudykunst, W., & Kim, Y. (1997). *Communicating with strangers: An approach to intercultural communication (3rd ed.)*. New York: McGraw Hill.
- Hammer, M., Gudykunst, W., & Wiseman, R. (1978). Dimensions of intercultural effectiveness. *International Journal of Intercultural Relations*, 2, 382-393.
- Lysgaard, S. Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright grantees visiting the United States. *International Social Science Bulletin*, 7, 45-51.
- クリッペンドルフ, クラウス(1989)『メッセージ分析の技法: 「内容分析」への招待』三上俊治, 椎野信雄, 橋元良明訳. 勁草書房
- 小池浩子(2001)短期国際交流における高校生の異文化認知『信州大学教育学部紀要』:105-112

稲田素子（1993）帰国子女の性格・特性，石坂和夫代表著『国際理解教育事典』創友社

田淵五十生（1993）異文化教育と体験学習：アメリカでの教育実習とホームステイの事例，渡邊文雄編『現代のエスプリ 229』，  
69-78，至文堂

（2001年9月25日 受理）